

コメント

鵜飼 哲

今、非常に深刻な話があります。あのンベンベさんは今日残念ながら来られなかったのですが、このネクロポリティクスについて、非常にいろいろなポイントがあげられています。地域としては二つ焦点があると思うのですね。一つは船田さんが触れられたアフリカ、ンベンベさんの出身地であるいまのアフリカがどうなっているか。そのいまのアフリカで起きていることが果たしてフーコーが言う意味において、バイオポリティクスで説明できるのか、という問題設定が一方で非常に強くあって、他方でもう一つの焦点はパレスチナなのですね。その二つが現在の状況を、彼がネクロポリティクスということを主張する場合にとりわけ大きな二つの例として挙げられている、というふうに思います。

私はここではしかし、先ほどの船田さんのお話のなかにもタイムスパンをどう取るのかというお話が出たのですが、一つはやはり「9.11」後の状況としてアメリカの原理主義キリスト教という話が出てくると、これは一方で本当に長いタイムスパンも取らないと分からない部分もいくつかあると思うのです。そのイス

ラムとのキリスト教世界の関係をどう捉えるかというときに、私がよく引くものの一つはエラスムスなのですね。エラスムスに『平和の訴え』という本があってこれは岩波文庫で出ていますけれど、これは近代最初の平和論と言われている本で、ご存知のようにエラスムスの時代というのは宗教戦争の時代ですね。この場合宗教戦争というのはカトリックとプロテスタントの宗教戦争で、その際平和は女神による、平和の一人称の語りなのです『平和の訴え』という本は。この中でそのことが一つです。現在にいたる大量破壊兵器の問題が出てきたのはこの頃、つまり大砲が使われだす。そうすると今までの白兵戦、要するにこういう時代になるとドン・キホーテみたいな人は過去の人になってしまう。戦争そのものが、大砲の弾が飛んでくれば勇気も何もあったものではないと、そういう時代に入っていく。そこで、いわゆる現代にいたる大量破壊兵器の問題が出てくるのはやはりこの頃ですね。その惨状を目の当たりにしてこの平和の女神がもういい加減にしてくれ、ということをやっていると、一つ一つなぜ戦争をしてはいけない

のか、というロジックは今読んでも非常に考えさせられるものがあるのですけれど、ところがこの最初の平和論であるエラスムスの『平和の訴え』の中に大変気になる一節があるのですね。要するにこの、エラスムスの目の前で戦争しているのはキリスト教同士です。そのことを特にエラスムスは嘆くわけです。そんなに戦争がしたいのなら、みんな手をつないで一致してトルコ人と戦争すればいいということをエラスムスが最初の平和論のなかで言っているわけです。この場合にトルコというのは先ほどの、クルド人が強制送還された、難民が強制送還された今のトルコではない。もちろんオスマントルコです。当時のイスラム世界はオスマントルコという帝国の形をとってヨーロッパと対峙していた。そう考えてくると、西洋にとっての平和というのは、第一に、非常に長いあいだ、キリスト教徒のあいだの平和、キリストの名における平和であった、ということが分かってくる。ではわれわれはどういう歴史的な局面にいるのかということを考えますと、第一次世界戦争、そして第二次世界戦争までは、まだこれは非常に大きな部分キリスト教国同士の戦争であった。ところが第二次世界戦争と現在の国連の体制のなかで、特にヨーロッパ人はその傾向が

強いと思うのですが、もはやキリスト教徒同士は戦争しない。要するに、ヨーロッパでは戦争はもはやしないのだという、歴史的な確信がものすごく強かったのですね。だからこそ旧ユーゴであれだけの内戦が起きたとき動揺が大きかったのです。まだキリスト教徒同士の戦争がくりうるのだという恐怖が非常に強かった。しかし、いずれにしても、かつてのように、キリスト教徒同士、キリスト教国同士、とりわけドイツとアメリカは、あるいはドイツとイギリスは20世紀に2回も巨大な戦争をしたわけで、ヨーロッパはキリスト教徒同士、キリスト教国同士の大変な戦争の数世紀の果てにいまEUという形をとりつつあるわけです。この歴史性に照らしてみたとき、要するに「9.11」の後にブッシュ大統領の口からクルセダー、十字軍という言葉が出てきたときに、それは単に彼は無教養であるとかと言って片付けられない問題があるのではないかというふうに思うわけです。それで、舩田さんのお話のなかで日本が今イラクに自衛隊を出しているという問題は、政治や権力関係の問題だけではなく、非常に大きな世界資本主義の経済システムのなかで起きているという指摘があって、本当にその通りだと思うのですが、他方でしかし、現在、多くの

中東世界を見るとシリアとイラン以外は全部既にアメリカの支配下にあるのです。これはもう大変なことで、エジプトもサウジアラビアも全部これは被占領状態なのです。そうすると、パキスタンから西、エジプトに至るまで、要するにシリア、レバノン、イラン以外は全てある意味でアメリカの支配下にある。これは非常に大きな地政学的な現在の条件であって、そこに日本がアメリカの側、同盟国として出掛けていっている意味を、自衛隊を出している人たちは分かっているのだろうか。逆に言えばそのことを批判している私たちはどれだけ深く考えられているのだろうか、という問題と、やはり現在の中東の、パレスチナ、そしてイラクを中心とする事態からわれわれは考えなくてはならないというのが、そこに一つある。おそらく西洋の近代の植民地支配自体がイスラムの支配している地域を迂回していかにインドに到達するかということから始まったわけですし、これはさらに遡れば、ムハンマドがなければシャルルマーニュはいないわけですから、つまりイスラムがなければヨーロッパそのものが出来てないわけですね。そして、ヨーロッパの近代化にとってイスラムが果たした、イスラムから古代の古典を輸入した歴史、その他あらゆる文化的なイ

スラム世界に対してキリスト教ヨーロッパ、ラテンヨーロッパが後進国であった時代のことが背景にあって現在のこの構図ができている、ということはじっくり考えてみないといけない問題だと思います。これが第一点です。

もう一点は、ところがそこで非常に不思議な反転が出来ている。この点が私がギル・アニジャールさんの仕事をいまの時代にとっても重要だと思う一つの理由なのですけれど、このホロコースト以後の時代の中でパレスチナ問題を一つのテコとして、このイスラム、ムスリムがキリスト教世界から最も反ユダヤ的な人々と考えられるようになってきているのですね。このことはやはり大変深刻なことだと私は思います。アニジャールさんの論文のなかにメル・ギブソンのパッションという映画、これはある意味で非常に忠実に福音書を映像化したものですが、要するにイエスを裁判にかけて、裁くのはローマの帝国ですが、それに対して訴えた側は、ラビに率いられたユダヤ教徒の大衆なのですね。その大衆が、ピラトがこの人の死に私は責任がないという、子々孫々までわれわれが責任を負うという。これはもう福音書にあるわけですね、それをそのまま今の世の中に映像化する

と、これは反ユダヤ主義だということになる。ここで何が問題かという、要するに一方では世界的な今の地政学的な条件、状況のなかでムスリムが最も凶悪なユダヤ教徒の敵であるという言説が主としてキリスト教世界で流布しているわけですが、歴史的に最も深刻な反ユダヤ主義というのは、疑いもなくキリスト教なのですね。キリスト教世界でこそユダヤ教が最も迫害され、ホロコーストに至るまでの出来事というのはやはりキリスト教世界においてです。前回ギル・アニジャーさんとお会いしたのは、実は今年の8月8日にジャック・デリダの家だったのですね。そのときには2ヶ月後に亡くなってしまうなんて私たち思わなくて。その際にデリダさんが言っていたことをちょっと紹介します。他でもこれを言ったのですけれど、要するに、いまのアメリカとイスラエルの関係を考えたときに、非常に深刻なのは、先ほど森先生のお話のなかにもあったキリスト教右派のなかにとりわけキリスト教シオニズムがあるという点ですね。簡単にまとめますとこの人たちは、終末のときが近づいている、先ほどの千年王国論に近いわけですが、世界の終末の前に、イスラエルにユダヤ教徒が集められる、そしてそこで善と悪の最後の決戦が行なわれる。だからその

終末の戦いにキリスト教徒はこのユダヤ教徒を支援して、悪と、これはイスラムですね、戦わなくてはならないと、こういう考えなのですね。しかし、最後には終末の前にユダヤ教徒は全部キリスト教徒に改宗することになっています。要するに2000年間の最悪の敵たるイスラエルと手を結んで、この形が実は出来ているのだということを私たちはデリダと話したのですね。本当にメル・ギブソンの映画が問題にされるあり方と、このキリスト教シオニズムとイスラエルのリクード党の幹部がキリスト教シオニズムの大会に出席して、世界中であなた方ほど頼りになる人はいませんと言っていること。いったいこれは何が起きているのかということが非常に深刻な問題になってきていると思います。つまりユダヤ教徒にとっていまのアメリカとの同盟関係が、いったいいいことなのか、ということです。そこで、アニジャーさんの論文の最後に出てきた、先ほどのお話のなかにもちょっと出てきましたが、自己憎悪、Selbsthaßとドイツ語では言うのですが、これは実はシオニズムが出てくる直前に、特に中央ヨーロッパのユダヤ人のあいだでユダヤ人特有の心の病として自己憎悪ということが言われたのです。シオニズムというのは単に政治的にヨーロッパの

ユダヤ人問題を、ヨーロッパの外の国民国家を形成することによって解決するというだけではなくて、この自己憎悪からユダヤ人が解放されるというある種の精神運動として形成された。ちょうどこれはフロイトの精神分析が形成されるのと同じ頃ですね。フロイトが活動した当時のウィーンというのはシオニズムの首都と言われていたほどで、フロイトの周りにもシオニストのような人もいれば、社会主義者のユダヤ人もいて、そういうなかでこのシオニズムは起きてきたわけですね。私は1987年の12月に第一次のインティファダが起きたときは留学中で、パリにいたんですけど、あるときイスラエル大使館に抗議のデモに行きますと、そこでインティファダの弾圧に反対するユダヤ人のグループ、それに対して親イスラエルの、要するにシオニスト的なユダヤ人のグループがぶつかっていた。そのときに左派のイスラエルを批判するユダヤ人の側からはその相手のグループに対して、「ファシスト」って相手をさして言っていたんですよ。それに対してシオニストのグループからどういう言葉が返ってきたかというと、これはマゾヒストですね。その後日本でも90年代に自虐史観という言い方が出てきますけど、だいたいこのあたりで相当のことが起きて、

シオニズムというのはある意味で、ユダヤ人特有とされたマゾヒスト的な自己憎悪からの解放のプログラムとしても登場してきた。そうすると、アニジャールさんが最後に問題にされている、愛とか、共同体や自分自身に対するナルシズムの裏に一体何があるのかという問題になってくる。これはフロイト自身「自我とエス」という論文では愛よりも前に破壊の衝動があるということをはっきり言っていますし、そうしますと、あらゆる文化の根底にはこの自己破壊への運動があると考えられる。そうすると、私がここで最後に日本と関連付けて考えたいのは、ンベンベさんの論文のなかにも suicide bomberの問題が出てきますね、しかしこれはとりわけフランス語圏ではカミカゼとよく言われるわけですね、これは、金井先生が最後に指摘されていましたが、日本のネクロポリティクスというのは戦争の期間、どういうものだったのだろうかとか改めて考えなくてはいけません。私自身は現在のパレスチナでの自爆攻撃をいいことだと決して思っていないけれども、これはやはり日本のカミカゼとは性質の違ったものだと考えています。いずれにしても、ここで、ネクロポリティクスとネクロカルチャーといいますか、死の文化、死の政治とこの死の文化の関

係ということを取りわけ日本の場合考えなくてはならないと思います。というのも、日本というのは毎年三万人の自殺者がいる国なのです。これはやはりネオリベラリズム的な経済改革が日本にも押し寄せてきてから増えているわけで、そういうときに、この自殺という問題をどういうふうに考えればいいのか。私は中央線の沿線で仕事をしていますけれど、中央線なんてほんとにしょっちゅう止まるわけですね。誰もが知っているわけです、誰かが飛び込んだということを。それはもう日常の一部なわけですね。そして実は日本の資本主義とは、この三万人の死者がいなければ、つまり誰も死になくなったらもう機能しないくらい大変なことなのです。この人たちが自分が死ぬかわりに誰かに責任を求めるようになったらいったい何が起こるか。そういうことを考えただけで、明らかに日本の資本主義の機能のなかにあり、その機能を可能にしているある種の死の文化、この死の文化が別様に発動されれば、その命令を受けて志願する。suicide bomberというのは命令されて行くわけではないですから、これはやっぱり根本的に違う。日本のカミカゼ志願ではないわけです。命令されて行く、こうした問題は、やはり先ほどの船田さんのお話のなかで手を見てとい

うことがありましたけれど、われわれの心のことを考えたときに、我々のなかにそういうものはないか、ということで非常に考え込まざるをえない。年間三万人の人々、一人一人自殺を考えなくてはいけないところに追い込まれるまで、そういうことを考えたことなかった人が、たくさんいるのだと思うのです。やはり自殺とは基本的に他者のことであります。それが、つまり死の文化が、いつどのようにして自分のなかで作動しだすのかということ。とりわけ日本のような国でこのネクロポリティクスがどういうふうに働いているのかをみるのは大変難しい問題ですね。すべてを死の文化に還元してしまえば、あっという間にオリエンタリズムみたいになりますし、普遍的なレベルでバイオポリティクスを問題としたり、ネクロポリティクスを問題としたりすること自体意味を失う危険があるわけですから、非常に注意しなくてはならないわけですが、私としては、この死の政治学ということのをわれわれの問題にひきつけて考えるために、死の文化ということの一つ間にいれて、例えば、なぜ日本でいまのような形で死刑が存続しているのかということとも結びつけて考える必要があるのではないかと、思います。

(うかい さとし・一橋大学)